

文學博士 金澤庄三郎述

國語教授上參考すべき事項

朝鮮總督府內務部學務局



國語教授上參考すべき事項

文學博士 金澤庄三郎述

今回の講演は、音韻及語法の二項に分けて、お話致し度いと思ひます。

第一 音 韻

國語教授上、音韻は極めて大切なことでありまして、言語即ち發音と申すも敢へて差支ないでおきます。世人は、動もすれば發音を輕んずる風があります、唯々似た音さへ出ればよいとして、發音の適否などは構はない、殊に目下の時勢として、國語の普及上一日の急をも争はねばならぬ際、發音などに貴重な時間を費すよりも、出来るだけ多くの語數を教へた方が宜いといふ人もありませうが、之は大變間違つた考だらうと思ひます。一國語の發音を正確に覺えるのは、結局其の國語を正確に覺えたので

あつて、朝鮮人に完全な國語の發音を教へ込むのは、即ち彼等に國語を完全に教授する所以であります。之に反して、發音を閑却すると、自分では分つた積りで居ても、人には通じない。文字に書けば分るが、口に言つては通じないことになる。之は書物上の言葉を覺えたのであつて、とりも直さず、死んだ言葉である、生きた言葉は、人が聞いて直ぐ分るものでなくてはなりません。

私の友人が、米國に行つて居つて子供をまうけましたが、その子供は、毎日耳で英語を聞き覺えた。或る日友人が子供を連れて外出した時、sidewalkを歩めと云つたら、子供は、sidewalkではない、sidewalkですと答へた、即ち友人は書物上の英語を覺え、實際の發音といふことに重きを置かなかつた爲、一寸した言葉の發音を誤り、反つて子供の爲に舉げ足をとられたのであります。

私も之と同様の經驗を持つて居るのであります、嘗つて伯林に參りました時、自分の泊つて居る町(Luipold)の方角を失つて仕舞ひ、馬車に乗つて、別當にルイトボー

ルド街にやつて呉れと命じても、更に通じない。色々いつて見てやつと分つたが、始め私はルイトポールドと發音して居た爲、彼等の耳に通じなかつたので、之はルイトポールドと發音すべきのでありました。

朝鮮語に於ても矢張其の通りで、先年私が騎馬で平壤まで行つた時、私は書物で覺えた朝鮮音を其の儘、平壤を *P'yŏng-yang* と發音したが朝鮮人には中々分り兼ねた。

P'yŏng-yang は正統な發音でありますが、實際は少し訛つて *P'ing-yang* と發音されて居ることを知らなかつたのである。又鎮南浦といふ港名なども其の通りで、之は元來鎮南浦で其の發音は *Cheung-nam-pho* でありますが、内地人の耳には *Chin-nan-pho* の如く聞えるので之を鎮南浦と書き誤り、それが反つて一般に行はれるやうになつたのであります。

以上は「發音即ち生きたる言語」といふことを具体的に説明したのでありますが、此れによつて見ても、眞に言語を覺え又教ふるには、眞の發音を覺え又教へねばならぬと

いふ事が明かであらうと思ひます。

この發音といふものは、決して染直しの出來ぬものであつて、一度發音の悪い教師に教はつたことは容易に矯正が出來ない。是に於て、朝鮮人に對し國語教授の任に當る者の責任は、極めて重大であると云はねばなりません。彼等に不完全な發音を教へるのは、畢竟彼等に偽を教へるも同様であります。

私が豫て主張して居る通り、元來國語と朝鮮語とは同系の言語でありまして、一見異なる様に感ずるのは、兩語とも其の本源は同一であるが、國語は絶えず變遷し、朝鮮語は或る形態のまゝ停滯して居るからであります。故に、少し古に溯つて、國語を朝鮮語と比較する時は、兩者は全然同種の言葉であるといふ事が分るのであつて、つまり朝鮮語は國語の古い語法、發音と一致するのであります。この關係を知つて朝鮮人に國語を教授するのど否とは、其の効果の上にどれ丈の差があるかといふ事は、私の贅言を要せぬ所だらうと思ひます。

今日の國語では、ア、ヤ、ワ三行の喉音の中混同して居るものがありますが、朝鮮語では今でも之を明瞭に區別して居る（イ||이、キ||위、エ||에、エ||왜、オ||오、ヲ||워）然し昔は國語でもこれと同様右の三喉音を區別してゐたのは勿論であります。又朝鮮語には、ツ(tsu)といふ音が無くて、テ(te)といふ音がありますが、實は國語の「ツ」も元はテと發音したもので、ツ、ミ(鼓)の如きも實際はte-te-teで、樂器の音を寫したものであります。

それから朝鮮語には、濁音及「ラ」行音で始まる言葉がありませんが、古い國語も同様であります。

次に、タ、ナ、ラ同等と申して、タ、ナ、ラ三行音の相通するのが我が古語の特徴であります。朝鮮語では、現に今日も普通この三音が相通します。今茲に彼我の例を挙げると

國語

丹比 tadi-in(元來はtan) n=d

駿河 suru-sa(元來はsun) n=r

朝鮮語

$\begin{cases} \text{하}(\text{narid}) = \text{하}(\text{natt書}) & r=t \\ \text{하}(\text{nu-ku誰}) = \text{du-ku} & n=d \end{cases}$

斯の如く國語と朝鮮語とは、根本に於て同一の性質を持つて居りますから、この關係を知つて居ると、朝鮮人に國語を教授する上に非常な便宜がある。即ち彼等に困難な發音は、如何にしたならば比較的容易に了解させることが出来るかといふ様なことは、朝鮮語を知つて居て始めて能ふ業であります。此の點に於て、私は國語教員は多少の朝鮮語を知つて居なければ、其の資格に於て缺けるところがあると主張するのがあります。

是れから國語と朝鮮語との音韻を比較し、朝鮮人にとつて發音の困難なる語の教授法に就て聊か卑見を申述べたいと思ひます。

一、母音

國語の母音は

ア イ ウ エ オ

の五音でありますが、之に諺文を當鉛めると

아 이 우 에 오

になりますが、朝鮮には、右五音以外、우(우)、오(오)に似て非なる으(eu)、어(어)の二音がある、우、오は合音、으、어は開音に屬するのであるが、然らば國語のウ、オは우と오、으と어の中孰れに近いか、即ち合音が開音かといへば、朝鮮音운중(un-tong 運動)が、國語「ウンドウ」となる如く國語のウ、オは、朝鮮音の우、오に當るから、どうしても合音の中に入る可きものであります。으、어はeu、eoに近い音で國語には例のない音であります。

二、子 音

(1) タ行音

タ行音の中、「ツ」は朝鮮にない音であるから、朝鮮人は往々之を過つて「チュ」と發音します。例へば、靴をクチュ、狐をキチュネといふ類であります。「ツ」は元來朝鮮音の ㅈ (tu) に當るので、古は矢張 ㅈ 同様 ㅈ と發音したものであるから、彼等が ku-tsu , ki-tsu-ne と發音し得ぬならば、寧ろ ku-tu , ki-tu-ne と發音させる方が宜い、之は確に ku-chn , ki-chn-ne より耳觸りもよく、且また理屈にも合つて居ると思ひます。

(2) ナ行音

朝鮮人はナ、ヌ、ネ、ノの音は出せるが、ニの音は出せぬ。二階をイカイ、日本をイツボンと發音するが如き其の例であります。然し、朝鮮人は絶対にニの音が出ぬのではなく、唯語頭にのみ發音し得ぬのであつて、語の中間若くは終には、例へば、 sa-ni (ha-ni-ra) sa-ni (ha-ni) の如く明瞭に出るのである。それ故、ニ音を教授するには、先づ「ニ」を他の音の下に結付けて、 sa-ni (ha-ni)、 sa-ni (ha-ni) を幾度も繰返へさせ、次第に ha と ni の間隔を遠くし、遂に ni を獨立して發音させる様にしたならば成功するで

ありませう。

(3) ラ行音

ラ行音も語頭に來ると、朝鮮人は發音し得ない。ラ、ル、レ、ロは之を na, nu, ne, no と發音し、「リ」は之を一と發音します。然し、chor-ra(全羅)、so-ri(聲)、na-ru(渡場)、so-to(互に)の如く語尾若くは語の中間に來た時は、内地人よりも一層明瞭にラ行音を發音し得るのであるから、之もニ音の場合と同様の方法で教授したら宜しからうと思ひます。

三、濁音

濁音も朝鮮人は一切語頭に發音し得ないが、工夫(kong-pu)を kong-bu、港口(hang-ku)を hang-bu と發音する如く、連濁の場合には十分發音し得るのであるから、之も前同様の方法で教授することが出来ます。

この方法に據らず、無理に濁音を教へやうとすると、彼等は愚鈍をウドン、雁をアン

などといふ様なことになる。そもゝ濁音はどうして生ずるものであるかといふに、清音の頭に母音か鼻音の性質が接續した時に出来るのであつて、例へば

a-pi(아비父) = abi

母音の場合

yang-pan(양반兩班) = yangban

鼻音の場合

之と反對に、破裂音(explosive sound) k, t, p の後には決して濁音が生じない、即ちhak-pu(學部)のkは破裂音であるから、決してhakpuとはならぬのであります。

アイヌ語にも濁音がないが、アイヌ人は、國語の濁音を模するに、清音の頭に^hを附け、例へば, hi-gae(着替)をking-gaeとする。昔朝鮮で出来た内地語の教科書を見るに、濁音を表はすには、皆清音の頭にo(^ho)を附してあります。又幕末に渡來した西洋人の著述にも、平戸をHirando, 長崎をNagasakiと書いてある。之等は今日朝鮮人に國語の濁音を教授する際、また參考すべき事項だらうと思ひます。

(1) ザ行音

ザ行音中「ジ」と「ゼ」は連濁の場合に於て朝鮮語にもありますが「ザ」と「ズ」は一切ないので、*zu-tsu*(頭痛)を *ju-chu*, *so-sai-masu*(御坐います)を *sojai-masu* と發音する。この二音の教授には誠に困るのであつて、其の適當なる方法に就ては、未だ考案中であります。

(2) ダ行音

ダ行音も朝鮮人は語頭に發音し得ぬが、*son-do*(松都)、*un-dong*(運動)、*su-to*(水道)、等の如く連濁の場合には容易に發音し得るのであるから、之も前の方法を用ひて教授するを便とします。

(3) バ行音

バ行音は、普通ハ行の濁音だと思つて居る人もありますが、實はバ行の濁音であつて、朝鮮人には、バ行音はハ行の濁音であることが天性的に分つて居ます。即ち *kon-be*、

pu(工夫)をkong-buと濁らし、h音は決して濁らしません。濁らぬのではない、實は音其の者に濁らぬ性質を有つて居るのである、このバ行音も、朝鮮人は、kong-bu(工夫)、tam-bai(煙草)、nam-bi(鍋)等の如く、連濁としては發音し得るのであります。

元來朝鮮人は、濁音といふ觀念がない、口では連濁の際立派に濁音を發しながら、何れが清音で、何れが濁音であるといふ自覺が無いのであります。それ故、このバ行音なども、前法に準じて、連濁のものを頻繁に繰返へさせつゝ其の間に濁音の觀念を與へ、然る後次第に濁音のみを單獨に隔離して發音させる様にしたら成功するだらうと信じます。

四、拗音

拗音の中、シャ、シユ、シヨの三音は朝鮮人殊に京城の人にとつて發音のむづかしい音である。それ故、大將と躰操、少年と壯年が同一に聞こえます。然し諺文には、立派にsha(沙)、shu(介)、sho(介)の文字がありますから、昔の人は確に之を發音したもの

と思はれる。現に釜山邊の人は、서울(京城)を文字通りにseoulと發音して居るから、昔存在したシャ、シユ、シヨ、三音を復活するのは左程困難ではなからうかと思ひます。それでこの三音を教へるには、國語の假名通り、シ音にア行音若くはヤ行音を附して si-a, si-u, si-o 或は si-ya, si-yu, si-yo として練習させ、次第にこの二音を接近して眞の拗音になるやうにすれば宜いのであります。

五、促音

促音は國語に於ては凡て「ッ」を以て表して居ります。

ハッタツ

發達

ケツカウ

結構

イツバウ

一方

レツシヤ

列車

然し朝鮮語には、四種の促音があつて、今でも嚴重に之を區別して居ます。例へば

pak 瓢(ウ)

pat 畑(ウ)

pap 飯(ウ)

par 足(ウ)

の如く、之を國語で書けば皆「パッ」になりますが、朝鮮語では言葉によつて夫々促音が違ふのであります。これを知らずして「ッ」一方で促音を教へやうとするから困難を生ずるので、朝鮮語の促音は、次に來る音に決して同化されない、hak-pu(學部)は飽くまでhak-puであつて、決してhappuとはなりません。然るに國語の促音は、常に下に續く音の爲に同化せられる。

hat-tatsu 發達

kek-kô 結構

ip-pô 一方

即ち國語の促音は、凡て次に來る音と同音で表し得るといふことを吞込ませたならば容易く發し得らるゝ様になることゝ信じます。

第二 語 法

音韻上から觀察して、國語及朝鮮語が密接な關係を有して居ることは前述の如くであります。語法即ち文法上の組立から見ても、兩言語は離るべからざる因縁がありますから、朝鮮語の組立を根本的に知つて居るといふことは、朝鮮人に國語を教授する上に極めて極重要な事項であります。

一、名 詞

用言から名詞を作るには、國語にも朝鮮語にも三種の方法があります。

- (1) 用言にハ音を附するもの

國語 {kokorosa-i}

志

tatami-i

畳

朝鮮語

sar-i (活) _ハ
kor-i (歩) _ハ生活 (살이)
街 (걸이)

(2) 用言に m 音を附するもの

國語

yasu-mi
tanosi-mi

休 樂

朝鮮語

choh-i (好) _ハ
kita-i (養) _ハ
para-i (吹) _ハ
sar-i (活) _ハ好事 (조흥)
膏 (기름)
風 (바람)
人 (사람)

この m 音の附くのは、國語では形容詞のみに限りますが、朝鮮語では右の例に於て見る如く、形容詞のみならず動詞にも附くのであります。

(3) 用言にk音を附するもの。

國語

{iha-ku
omoha-ku

曰はく

思はく

朝鮮語

{sar(活く)-ki
choh(好し)-ki

生活(살기)

好事(조키)

「曰はく」、「思はく」等が名詞であることは、「曰はく」といつたならば必ず終に「いふ」といふ言葉を反復することに依つても分ります。

次に、内地及朝鮮の漢字の取扱ひ方に就てお話すると、例へば、「行」といふ漢字は、内地では左の如く多様に使はれます。

急

行カウ

行ギヤウ

儀

行サシ

燈

正 行^{ツラ}行^{ユキ} 長三 行^{クダリ}

然るに、朝鮮では漢字の取扱ひ方が大に違ひまして、一個の漢字でも、二字三字の熟字でも、乃至は十字二十字の句でも皆獨立の名詞と見倣して音讀し、^ㄱ다(ス)といふ動詞を加へて始めて活用語となるのであります。例へば「不遠千里」といふ句も朝鮮では之を一個の名詞と認め

不遠千里^ㄱ다

として始めて活用ある言葉となるのである。このやり方は、「運動」などといふ場合には國語でも「運動ス」と云へますけれども、「美」などといふ形容詞の場合は「美ス」といふ譯には行きません。然るに朝鮮語に於ては、之も

美^ㄱ다

といつて結構通用するのであります。これは、内地及朝鮮に於ける漢字の取扱上、大に異なる點であらうと思ひます。

二、代名詞

國語と朝鮮語とは、其の代名詞がよく一致して居る。朝鮮語で一人稱を^나と云ひますが、昔は内地の古語と同じく、^나と云つたもので、また國語の^{われ}（我）は、朝鮮語の^나（我等）とよく似て居る。人代名詞が時代を経るに従つて、次第に賤しい意義を帯びるに至つたことなども、彼我一致して居ます。即ち國語の^汝は、昔は上下共に對して用ゐたものであるが、今は朝鮮語の^너（汝）と同じく、下の者にしか用ゐなくなつた。要するに、人代名詞の使用法は、極めて困難なもので、^나と云へば如何にも高慢さうに聞えますから、複數にして^들（ワレ／＼）、^들（ワレ／＼共などと云ひ、或はアナタ、ソナタ、コナタなどと方角でもつてばんやりと云ひ表す様になつて居ます。之は朝鮮語でも同様であつて、自分のことを^저（アレ）或は^그（アノ人）などと方角を變へて間接に

いふのは、つまり自分を卑下していふ言葉なのであります。

又朝鮮語には、様、殿に相當する語がありません。人を尊んで呼ぶ時は、姓の下に公といふ字を附するか、或は大抵其の人の官名(官を罷めた後も)を附して、例へば金主事などと呼ぶのであります。

三、性

名詞に就て男女の性を別つに、國語では、ヲとメ、コとメ、セとイモ等の種類があるが、其の中セとイモに就てお話すると

男性

女性

セヒト(兄人)

イモヒト(妹)

の如く用ひますが、朝鮮語にも之に相當するseとmoがあります。

男性

女性

su-riak(수리악雄鷄)

am-riak(암리악雌鷄)

su-kai(수개雄犬)

am-kai(암개牝犬)

國語の「セ」も元は人間の外一般動物にも用ひたので、シカ(鹿)のシはセの轉で、メカ(牝鹿)のメに對し男性を表はしたものであります。斯の如く、セは人間にも動物にも用ひますが、se_{am}は、現今の朝鮮語では動物にのみ限つて居ます。然し古は矢張國語と同じく人間にも用ひたものと見えて、母を_{am-i}男子を_{sa-nahou-i}といふなどの例があります。

四、數 詞

國語と朝鮮語との數詞は、他の言葉の類似に似ず、全然別物であつて、更に共通の點がありません。尤も兩者共に其の發達が不十分で完全に出來上らぬ中に、便利な十進法の支那數詞が輸入されたので、直に之を採用したのであります。

純粹の國語の數詞は、「ヒトツ」から「トラ」までであるが、「トラ」の「ヲ」は尾の意で、「トラ」は數の終りといふ意味であります。それで十以上になると、また始めから繰返

して、トラアマリヒトツ(十一)、トラアマリフツカ(十二日)など、數へました。

朝鮮語の方は、一から九十九まで純粹の朝鮮語で數へることが出來ます。この點は朝鮮語の數詞の方が進歩して居るのであります。又國語には

ヒトツ

フタリ

フツカ

といふ様に、數詞から引きはなしては、一向無意味な一種の接尾辭がありますが、之は朝鮮語にはあまり無い様です。

尙朝鮮人に國語の數詞を教授する際、注意を要する點は、國語と漢語と混合して居ることです。即ち一日と漢語で云ふかと思へば、すぐ次にはフツカと國語が來るヒトリ、フタリまでは國語だが、三人は漢語です。斯様に國語の數詞は複雑して居ますから、教授者は餘程骨が折れます。又朝鮮語では、十日以下ならば、初一日、初二

日といふ風に必ず初の字を頭にくつ附け、百、千、萬などといふ場合には、必ず一百、一千、一萬といふことになつて居ます。之れ等も教授者の留意し置くべき點であらうと思ひます。

以上述べました通り、數詞其の者は彼我全然沒交渉ではありますが、數詞に聯關して居る言葉の中には、共通のものがあります。例へば

國語

朝鮮語

yorodsu(萬)

yōros(ヨロス衆)

(a)-mane-si(普)

man(만多)

morō(諸)

moto(모토都)

tsure(連)

teur(투達)

其の他國語で人々、家々など、同じ名詞を重ねて多數を表はすことがありますが、朝鮮語でも同様に、na-nar(日々)、ta-tar(月々)、chip-chip(家々)なども云ひます。

五、用言

國語の用言は、極めて複雑であつて、形容詞には二種の活用があり、動詞にも正格と變格とがあつて、更にそれが色々な活用に分れてゐます。然るに朝鮮語に於ては、動詞も形容詞も活用が一であつて、而もそれが至極規則正しく、且簡單であります。それ故、朝鮮人に對し、複雑な國語の用言を教授するのは頗る困難なことで、殊に今日の口語は、實に煩雜極まつたものであるから、之を十分了解させやうといふのは、非常な仕事と申さねばなりません。

(1) 名詞法

國語では、動詞及形容詞から名詞を作つた例が澤山あります。其の種類は

- (イ) 一 語尾の名詞形
- 三 語尾の名詞形
- (ロ) 二 語尾の名詞形
- ハ) 三 語尾の名詞形

の三であつて、其の轉成の形式は、朝鮮語と同様であります。具體的の説明は、前項名詞の條に述べましたから、茲には省略しますが、唯兩者の異なる點は、(イ)は國語では動詞のみに限りますが、朝鮮語では形容詞にも左の如く共通して居ます。

tōp (더위暑氣).....tōw-i(더위暑氣)

chhip(춥寒).....chhiw-i(치위寒氣)

khen(크大).....khen-i(크이身長)

又(ロ)は、國語では形容詞に限つて居ますが、朝鮮語では形容詞にも動詞にも行はれます。

動詞 {pur(불어吹).....para-m(바람風)
nira(니라謂).....nira-m(니름名)

形容詞 {usu(웃笑).....usu-i(우습可笑味)
tara(다라異).....tara-i(다름相違)

次に(ハ)は、國語に於ては、動詞にのみ行はれて居るが、朝鮮語では、動詞のみならず形容詞にも應用されるのであります。

top (덥暑) …………… top-i (덥기暑さ)

ikheu (크大) …………… ikheu-i (크기大さ)

(2) 副詞法

國語の副詞法には二種あつて、一つは、humi-tsubusu (踏潰す)、lik-i-dasu (引出す)のhumi, lik-iの如く、専ら動詞にのみ屬し、iの語尾をとるものであります。之は文法上普通連用形と稱しますが、此の形は明かに副詞の性質を帯びて居るものであります。此の形は朝鮮語にもあつて、大抵形容詞に限られて居ります。

manh (만多) …………… manh-i (만히多く)

noph (높高) …………… noph-i (높히高く)

も一つは、i語尾の副詞形で、國語に於ては主に形容詞に限られて居ります。例へば

yo-ku(善)、taka-ku(高)等の類でありますが、朝鮮語にもこれに相當する語尾の副詞形があります。

kheu(크大)……………kheu-koi(크게大きく)

ohk(적少)……………ohk-koi(적게少なく)

之を要するに、今でこそ國語では動詞と形容詞とが分離してゐますが、その實兩者の區別は随分曖昧なもので、形容動詞などといふ新たな名稱まで出來て居る有様ですが元は失張朝鮮語同様兩者の活用は同一であつたに違ひないといふことを知つて載き度いのであります。

(3) 「有」といふ動詞

有(有)といふ動詞は、非常に多様の働きをする語でありますが、朝鮮語にも之に該當する有(有)があつて、同様の作用をします、有(有)が有(在)となり、更に有(得)となるのは、有(在)に轉じ、尙(得)に變ずるのとよく一致して居ります。さて有(有)

が例へば *mir*(見)といふ動詞に附きますと次の様な種々の働きをします。

一 所相
二 能相
mir-aru
三 敬相

尙この外、例へば *tsuku*(盡)といふ自動詞に *ru* が附けば、*tsuku-aru*(疲)といふ別義の自動詞を生じますが、*agru*(舉)といふ他動詞に附くと、*agru-aru* といふ自動詞になるのです。之は、朝鮮語に於ても同様でありまして、*ru* の畧なる *ri* を附して自他の區別を立てるのであります。

(イ) 自動より他動になるもの

na (ナ出づ) *na-ri* (ナ出だす)

cha (チャ充つ) *cha-ri* (チャ充たす)

(ロ) 他動より自動になるもの

mo(모集む)……………mo-i(모이集まる)

pak(박箝む)……………pak-i(박이箝まる)

以上の五種類は、國語、朝鮮語共同一の働きでありますが、朝鮮語には更にも一つ使役の相があります。例へば

po(보見る)……………po-i(보이見さす)

mök(먹食ふ)……………mök-i(먹이食はす)

然るに、これ等 poi, mök-i は、使役相を表はすと同時に、所相をも表はし、「見らる」「食はる」の意にもなるのであります。

以上の如く、朝鮮語は自他、使役、受身等同形のものが多いため、朝鮮の兒童は、よく國語の自動詞と他動詞、使役相と所相とを間違ふのであるから、教授者は餘程この點に注意を拂ふことを要します。

(4) 「爲^ス」といふ動詞

朝鮮語には、國語の *ni-sa-n*(見さす)などの如く、使役相に「爲^ス」といふ動詞を用ひることなく、其の代り *i*(有)を用ひて居ることは前述の通りであります。

現今の朝鮮語には、「爲^ス」といふ動詞がありますが、古は「爲^ス」と同様の *ni* といふ形がありました。其の證據は、朝鮮語には

pöt(曳脱ぐ)……………*pöt-la*(曳^ス脱かす)

an(抱く)……………*an-ki*(抱^スかす)

といふ様に、動詞に *ni* を附して使役を作る形があります。所で「爲^スせる」の意の *ni-ni* といふ動詞の *ni* は、明かに右の使役形 *ni* に相當するものでありますから、残りの *ni* は「爲^ス」に該當しなければなりません。私は斯の如き考證の下に、古は朝鮮語にも國語の「爲^ス」と同様の *ni* の存在してをつたことを信ずる者であります。

然るにこの *ni* は、其の後忘れられて仕舞つて、現今は之に代ふるに *ni* なる動詞を以て「爲^ス」の用をなさしめて居るのであります。所がこの「爲^ス」は、口語では非常に不規則と

なり、賀スル、噂スル、勉強スルと云ふかと思へば、察シルとも云ひ、又、通ジル、煎ジルとも云ひます。それ故國語教授者はこの「爲」には餘程注意せねばなりません。

(5) 敬語法

敬語法も、國語と朝鮮語とは其の構造から使用法まで、大變よく似通つて居ます。一昧、敬語といふものは、餘程よく使ひ分けぬと聞き苦しいものであります。唯叮嚀な言葉を使ひさへすればとて、それで必ずしも敬語といふことは出来ません。敬語は、其の人に對して身分相當な言語を用ゐることであります。

敬語使用上國語と朝鮮語と違ふ點は、朝鮮語では年少者に對しては、たとひ他人の子女にせよこれに低い語を用ひることであります。此れ等も教授者は大に注意せねばなりません。子供に對してのみならず、朝鮮では凡ての身分階級に應じて、夫々言葉遣に嚴重な區別があるから、我々が朝鮮語を話す場合に敬語法には一番閉口するのであります。朝鮮語の敬語使用法が如何に大事であるかといふことは、彼の大院君の激怒

に觸れて、幾萬の生靈を犠牲に供した耶蘇教徒殺戮事件も、實に佛國宣教師が大院君に對して朝鮮語の敬語法を謬つたのに基因してをるといふことを知つたら、蓋し思半ばに過ぐるであります。

敬語には大体左の三種があります。

(イ) 生來の敬語

普通形

敬語

國語

くふ(食)
めし(飯)

たべる

ごはん

朝鮮語

mok[막](食)
cha[차](寢)

chapsup[잡수]

chumusi[주무시]

茲に注意すべきは、朝鮮語では「御」の字は王者に關係ある事物にのみ限つて使用することあります。

(ロ) ar(有)を附して敬語となすもの

普通形

敬語

yuk(往)……………yuk-aru

nas(爲)……………nas-aru

kudas(下)……………kudas-aru

朝鮮語でも右のar(有)と同様 i(有)の複合に依つて敬語が出来ます。

hã(爲)-o……………hã-o-i(-ta)

(ハ) su(爲)を附して敬語となすもの

普通形

敬語

yuka(往)……………yuka-su

kaka(書)……………kaka-su

朝鮮語にもこのsu(爲)に相當するsuを附ける形があります。

普通形 敬語

po(見)……………po-si(-ta)

ka(往)……………ka-si(-ta)

此の外、朝鮮語にはも一つ p 形の敬語法があります。

po(見)………po-p

ka(往)……………ka-p

此の形は、古く國語にもありました。朝鮮語の p 音は、國語の h 音に該當しますから h 音の附く國語の敬語法は、つまり之と同一と見做すことが出来るのであります。

nore(宣)……………nora-he(宣)

tsnku(付)……………tsuka-hu(仕)

matsuru(奉)……………matsuro-hu(從)

これは、祝詞イハヒコトなどに多くあつて、神に對し敬意を含めた形であります。尤も現今では

使用しませんが、朝鮮語丈けは依然として今も古い形を遺して用ひて居るのであります。

(6) 連躰形

國語には連躰形が一種しかありません。例へば

yuku-toki(往く時)

の如くで、これは「きのふ往く時」「けふ往く時」「あす往く時」といふ風に、過去、現在未來を通じて凡て同形であるのに、朝鮮語の連躰形には整然たる時の區別があります。

連体言	lia	{	-ian(さん)	現在
			-u(を)	過去
			-i(を)	未來

斯様に時の區別があるに拘らず、朝鮮人は「語尾の未來形を過去にも現在にも併用する習慣があります。朝鮮の兒童が、よく「學ぶる時」「返する時」などと誤つた形を使用

するのは、全くこの習慣に基因するのであつて、學術上から見れば、頗る面白い現象だらうと思ひます。

(7) 打消法

打消法は、國語と朝鮮語と大變似た點がありますが、ただ違ふのは朝鮮語の方は、必ず打消さるべき語の前に否定語を置くことであつて、恰度國語で禁止を表はす *na-yulki* (勿往)、*na-ko* (勿來) などと同様の方法であります。

an-ku (안가)

往かず

an-ga (안사)

買はず

(8) 助辭

(イ) 主格を表はす助辭

朝鮮語で主格を表はす助辭は、*i* でありますが、國語にも古くはこの *i* がありました。

例へば

紀の關守い。

家なる妹い。

などで、「捨伊^{スツル}」などの伊も、朝鮮語に同様の例があります。

(ロ) 造格を表はす助辭

朝鮮語には、造格(instrumental case)を表はすroといふ助辭があります。例へば

pai(배舟)……………pái-ro(배로舟にて)

naŕ(노馬)……………nār-ro(노로馬にて)

pata(파다海)……………pata-ro(파다로海より)

これと同じ形が國語にもある、それは「舟から行く」「陸から行く」の如きからの「ら」であります。このroはまたIt-pou-eu-ro(日本へ)、chūp-eu-ro(家へ)の如く方向をも表はしますが、國語の「友がり行く」「妹がり行く」などの場合に於ける「が」は處の意味ですから、あとの「り」は方向を表はすものであつて、恰度右のさに一致して居ます。

は時として之に代ふるに目的格の^ニを用ふることがあります。例へば *chip-en-ro-ka-ta* (家へ行く)といふのを *chip-wi-ka-ta* (家を行く)などといふ類で、朝鮮人がよく「好い時節を逢つて」「父母を別れて」「舟を乗つて」などと誤用するのはこれがためである。然し之は國語にもある形で、古は「乙女を逢へりける時」「母を別れて」などと云つたものがあります。この關係を知つて居ると、朝鮮人が國語の天爾波の使用を誤る原因も分るし、同時に教授上にも大に便利があると信じます。

(ハ) 疑問を表はす助辭

疑問を表はす助辭としては、國語に「や」「及」「か」の二種があつて、「や」は終止を受け、「か」は連体に續き『ありや、なしや』あるか、なしか『來やくと』來るか／＼の如く用ひます。朝鮮語にも之と同様に *ya, ka* の二種がありますが、連体言の未來を受けるには必ず *yo* を用ふることになつて居ます。

su-ya

lä-nän-ya 새날야

su-ru-ka

här-ka 할가

斯様に其の形式、用法の相似て居るのみならず、國語でやの係を結ぶには必ず連体形を以てする如く、朝鮮語にもこの係があつて、之を結ぶには未來形を用ふることゝ定まつて居ます。

第三 結 論

以上述べた所は、頗る簡單でありますが、要するに國語と朝鮮語とは極めて深遠な關係のある言葉でありまして、其の源は同系でありますから、國語教授者はどうしても兩者の關係を辨へて置く必要があります。朝鮮人の國語使用上の誤謬を正すと同時に彼等に對し比較的容易に國語を教授しやうと思へば、多少朝鮮語を知つて居なければなりません。朝鮮語を學ぶは、畢竟彼等の心情性格を知る手段であると同時に、彼等に正確な國語を普及する唯一の方便であります。

朝鮮人に國語を教授する上に於て、研究すべき點は猶多々あるであらう。親切な教授者は、彼我兩言語に於ける天然の擬聲語に至るまで精細に研究して置く必要があらうと考へます。當事者は、宜しく自己の職責の重大なることを自覺して、國語教授上一層工夫するところが無くてはなりません。

(終)

